

平成 29 年度社会福祉法人 東京聖新会

事業報告

1. はじめに

平成 29 年度の社会福祉法人東京聖新会は、次年度に予定されている介護保健単価改定を目前として様々な取り組みを行い、地域のニーズに合わせた事業運営を展開してまいりました。特に 2025 年問題を目前として介護人員不足に対して積極的な対応を試みています。2017 年 11 月にはベトナム人技能実習生を受け入れるために現地で面接を実施してきています。その際、ベトナム国立医療大学卒業生 3 名の内定を決め、彼らは現在日本語習得に励んでおります。こられの Challenge が円滑に進むと他施設の方々も、外国人採用に一步踏み出せるのではないのでしょうか。こうした新しい挑戦こそが社会福祉法人としての社会貢献につながるものと信じ、その他、地域に対する取り組みも継続的に行っています。

また、今年度は東京聖新会の取り組んできた ICT 促進の成果を法人内だけで共有するだけでなく、日本内外に発信を行ってまいりました。聖新会職員たちは内外の学会やシンポジウムの機会を得て、それぞれ堂々と発表を行っています。職員自ら経験値を言語化し、文章にまとめることで他の職員に波及効果をもたらし、法人全体が活き活きとした「力」が漲っていると感じます。また前年の AMED のロボット導入実証実験だけではなく、新たな IT 機器の導入とその検証も進められていました。そうした取り組みは全て文書化され、蓄積することで法人の「Knowledge」へと進化していくものと思います。これは東京聖新会の大きな社会貢献のひとつとして挙げられるのではないのでしょうか。

時々刻々と移りゆく社会情勢いち早く読み込み、計画的に、各種事業に取り組み、社会福祉法人として確実な法人運営の継続を図ることを大きなミッションとして、平成 29 年度についても東京聖新会は社会福祉法人として「地域社会貢献」を公正、且つ適正に、透明性を以って進めてまいりました。不足はありながらも、地域社会のニーズに、迅速に、そして、しなやかに対応してきたものと考えております。

今年度の東京聖新会の取り組みは大きく三つに分けられます。

第一に、社会福祉法人の「あるべき姿」としての一番の根幹である法人理念の実践にかかる取り組みです。ゲストの「その人らしさ」をその生活のなかで確実に再現していただくためには、職員たちの介護に対する基本理念と、それを実践する東京聖新会の理念への理解は不可欠です。そのために「クレド・・・私たちの約束」を中心に東京聖新会職員としての職業倫理を常に振り返る法人理念研修は全職員で毎回取り組んでいます。クレドは、触れる度に、自らの業務を振り返り、見つめなおすことができる素晴らしいきっかけとなります。このクレドの存在は、東京聖新会の「宝」なりつつあります。クレドの実践を通して、今後、法人としての挑戦力、実践力がますます高まっていくことに期待します。

第二に、社会福祉法人が行っている地域への社会貢献の「見える化」です。東京聖新会では在宅生活を支えるサービスとして向台地域包括支援センターを始め、居宅支援事業所、訪問看護訪問リハビリ事業の運営を行っています。なかには、通所リハビリに通われている方が急に休まれた時など、状況によって訪問看護が様子を伺うサービスを行っていることもあります。これらはすべて無料とし、必要があれば地域包括支援センターからの応援要請にも法人の専門職職員がサポート体制をとっています。また、リハビリマシンの無料開放サポートや、認知症カフェ（むこなみカフェ）開催周知は HP やラジオ「みんなおいでよ！東京聖新会」で行っています。市民主体の卓球倶楽部も賑々しく開催され、新たに「給食試食会」も開催されようとしています。さらに地域の餅つきとして定着している「向台地域育成けやき会」の各種イベントの企画サポートを継続してきた結果、今年度は大規模災害避難所訓練とのコラボレーションは進化し、地元 FM ラジオ局と

の連携により、日赤群馬災害支援センターからヘリコプターが登場することに繋がりました。参加人員は延べ1300名以上の市内でも大きなイベントとして認識度がにわかに高まっています。

こうした「体験的」な取り組みを地域に「見える化」することで、東京聖新会が市民のみなさまに、より身近なものとなっただけであれば幸いです。地域密着の社会貢献事業として、しっかりと継続させていきたいと考えています。

第三の取り組みとして、新しい分野への挑戦研究を社会貢献事業のひとつとして行っています。

2016 日本医療福祉介護機器開発研究機構 (AMED) によるロボット介護機器開発・導入促進事業(基準策定・評価事業)「ロボット介護機器開発に関する調査」の検証法人として採択された昨年に続くロボット導入の実証実験は、今年度はさらに他メーカーに及び、東京都、AMED や JARI、日本テクノエイド協会等からの研究調査の依頼を受けました。社会から福祉分野の研究機関としてみとめられた「証」ではないでしょうか。

こうしたトライアルは、介護事業者として、単に介護サービスの提供を行うだけが機関たる所以ではなく、介護業界全体を俯瞰し、将来を見据え、実践を根拠としてコミットできる機関であることが求められます。新たな Challenge をし続けることが「社会福祉法人の在り方」のひとつとなってくるのではないのでしょうか。新たな可能性へのチャレンジとして、先進情報先進技術への提案、実践等を、今後も東京聖新会から発信していきたいと考えています。

さて、平成 29 年度の当法人事業につきましては、「地域からより信頼される社会福祉法人」として上記の各種の取り組みを具体的に策定し、実践致してまいりました。以下、社会福祉法人東京聖新会平成 29 年度の事業報告といたしますので、ご熟読の上、ご理解をいただけますようお願い申し上げます。



市民卓球倶楽部から・・・ゲストも参加されています。





UCD Japan Group

Seminar Series

Supporting Ageing with Communication Robots - Talk & Demonstration -

Thursday 28th September 2017

from 11.30 to 1.00pm in

Community Space, Bank of Ireland
(University Branch Montrose)



左から、千葉大諏訪さゆり教授、東京医大増山茂教授、東京聖新会尾林理事、アイルランド銀行頭取、アイルランドダブリン大学学長、アイルランド日本三好大使、ダブリン大学小舘教授、NTT データ中井課長



わたしたちの約束 「心づくしをみなさまへ」

わたしたちは利用者さまを「ゲスト」とお呼びしています。文字通りお客さま(**Guest**)という意味ですが、**GeST: Get Smile Together** 『一緒に笑顔を』という意味も含まれています。

・ゲスト、ご家族との約束

わたしたちは、入所中あるいは在宅にいらっしゃるゲストが最後までその人らしい暮らしを送ることができるよう、ゲストとご家族の意思を十分に尊重し、地域のもつあらゆる社会資源を活用しながら、できる限りの支援を行います。

・地域の人々、医療・介護・福祉チームとの約束

わたしたちは、地域のみなさまの誰に対しても誠実な対応を心がけます。みなさまにとって『快適』『安全』『安心』できるサービスを提供いたします。そして、地域のみなさまから『信頼』されるように努めます。そのためには、ともに地域で活動する医療・介護・福祉に携わる多職種の仲間との協働が肝要だと確信します。その仲間からの要請にはできる限り迅速に対応いたします。

・社会との約束

わたしたちは、日本の介護保険・医療保険制度の中で可能な限り、ICF（国際生活機能分類）の理念に基づいたサービスを提供します。障がいのあるなしにかかわらず、子どもたちから高齢者まで誰もが健康で安心して暮らせる生き生きとした長寿健康社会実現のために努力します。

・共に働く仲間との約束

わたしたちは、多くの職種が連携することで成り立つ社会福祉法人東京聖新会の一員として働くことを誇りとし、それぞれの立場で果たすべき自らの役割と責任を理解し、共に働くすべての仲間を尊敬し、互いに協働して眼前の課題を克服します。

わたしたちは、新しい知識や技術の習得に挑み、同時に心を豊かにする芸術的感動を大切に、絶えざる切磋琢磨を忘れません。

2. 基本理念 運営方針

＜法人基本理念＞

「心づくしを皆様へ」

東京聖新会は、誰もが健康で安心して生活できる長寿社会の実現を目指し、「快適」「安全」「安心」「信頼」をゲストの皆様と地域の皆様に提供できるよう心を尽くします。

さらに、ICF（国際生活機能分類 International Classification of Functioning, Disability and Health）の視点から、提供するサービスの内容を考え続けます。

フローラ、ハートフル、ふたつは一体として・・・

フローラ田無は「住み慣れた環境で自己実現や社会参加を果たしながら安心して住み続けていただける施設」とし、また「医療施設から在宅復帰へと繋ぐ架け橋」としてのハートフル田無はゲストおひとりおひとりのニーズに合わせた機能訓練を行い、全人的復権（人間性の回復 リ・ハビル）を進めます。両施設共にゲストの日々の生活の支援は、パーソン・センタード・ケア「その人らしさ」の再現、「自己実現」を基本とし、画一的なケアや、介護側の都合によらない「個別ケア」を基本として施設サービスを実施します。ゲストが自立した生活を営むことができ、速やかに在宅復帰や社会参加できる環境を整えて参ります。そして、

地域に住まう皆様からの地域資源のひとつとしての使命を担い、重ねて地域から信頼される法人となることを目指します。

＜法人の目標＞

法人基本方針に則り、下記に法人目標を掲げます。

個人の尊厳を守り、法人を取り巻く地域との連携を図り、パーソンセンタード・ケア「その人中心の」「その人らしい生活の実現」をできることを目指します。法人としてICFの視点から、可能な限り「できること」を「できる範囲」で計画し、ゲストだけではなく、地域からの満足度を高められるよう実践します。また、ゲストのニーズを的確にキャッチし、常に「何が必要とされているか？何が大切なのか？」を考え、社会情勢等にも柔軟に対処できる力強い運営を継続して参ります。

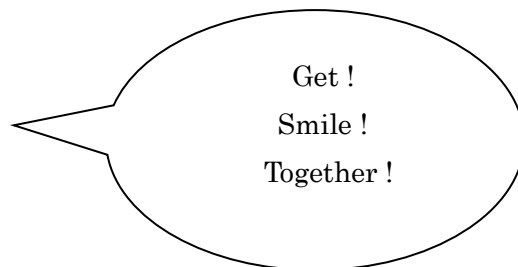
「心づくしをみなさまに」

- 一、「はい」という「素直な心」
- 二、「すみません」という「反省の心」
- 三、「私がします」という奉仕の心
- 四、「おかげさま」という「謙虚な心」
- 五、「ありがとう」という「感謝の心」
- 六、サービスをご利用になる利用者さまは「ゲスト」として
「もてなし」の心をつくします。

「ゲ」 GET

「ス」 SMILE

「ト」 TOGETHER



ICF の視点とは…

1. 何らかの意欲を持って色々な生活機能を使い、環境と相互作用しながら生活し人生を送っていることを大切にする。
2. 何らかの生活機能の低下に（障害）があっても、自分なりに乗り越えて意欲を達成しようと人間はさまざまな生活機能を使っていることを尊重する。
3. 人間の障害を克服するために、医学モデル・社会モデルを結合して障害をとらえ、ケアを検討・実施し、本人自らが意欲の達成を目指すことを支援する。

上記を基本目標として、下記の中長期目標をおきました。

＜長期目標＞

ゲストが安心、安全に日常生活を送り、機能が向上することで自立できるよう支援いたします。

- ① ゲストの健康情報の管理システムを構築し、効果的な地域との連携を促進
- ② ゲストの機能向上を図り、在宅への復帰を促進
- ③ 地域のみなさまが在宅生活を継続できる包括的なシステムづくり
- ④ サービスの向上、さらなる個別ケアの充実

- ⑤ 地域のニーズを反映した適切な入退所支援
 - ⑥ 地域社会に向けての貢献と運営の透明化
 - ・・・災害時に強く、地域社会に対応できる施設運営
 - ⑦ 設備などメンテナンスの実施
- 「東京聖新会はひとつ」を合言葉として以上の内容に取り組みます。
- ⑧ 社会福祉法人として社会貢献、地域貢献に繋がる新たな可能性を検討します。

＜中期目標と成果＞

① について…ゲストの健康情報の管理システムを構築し。効果的な地域との連携を促進

ゲストの介護医療情報システムの構築を目指し、東京聖新会全体として情報の標準化を進めました。個人情報の取り扱いには十分な配慮を行い、システムなど周知徹底のための研修を実施しました。「個人の尊厳の尊重・権利擁護」等の研修で周知徹底しています。向台町地域包括支援センター 6 名配置、居宅支援事業所 6 名配置として音声入力等システム的な連携と拡充を進めました。

(成果)

- 1) 「システム管理委員会」を活性化させ、日常業務（看護、介護、リハビリ）情報の ICT 化を進め、情報の共有化を促進。
- 2) 外来の医療情報・介護福祉情報を併せた個人情報全体の取り扱い方法の部門間での共有化
- 3) これらの個人情報（個人の意思に基づき）地域の病・医院、歯科医院などと情報交換可能となるシステム、「仕組み」作りの一環となるように、地域と連携化促進。

② について…ゲストの機能向上を図り在宅への復帰を促進

転倒などの事故予防を「見守りカメラ」や「眠りスキャン」を活用し、生活リハビリを含めたリハビリテーションについての意識を高め、デイケアのあり方の再検討と再構築を行い、地域へのアプローチを行いました。在宅への復帰率は 3% 程度向上しています。

(成果)

- 1) 個別リハビリ及び短期集中リハビリサービスはもとより、介護保険以外でのサービスとしてのリハビリシステムの実践。
- 2) 介護予防マシン 3 台を毎朝 50 分、地域に開放。専門スタッフを配置し、運動機能の評価を行った。卓球台スペースを開放し、市民主体の卓球倶楽部のサポートの実施。
- 3) 老人保健施設として、在宅復帰を進めるために、デイケア、フローラ田無短期入所生活介護と連携を進め、リハビリシステムを向上させ、地域のニーズへ対応。
- 4) ICT を進め、専門性を活かした、介護職への教育と指導制度の確立
フローラの「見守り」カメラ 20 台の継続活用。映像等転倒事故の事例の検討に利用し、施設内研修に応用。結果、フローラにおける外傷事故を予防した。
さらに、ハートフルでは「眠りスキャン」が 10 台導入され、見守りシステムが拡充された。
事故発生率は全体的に低下した。
- 5) 住み慣れた地域で在宅生活を継続できる地域市民の身体機能向上のシステムづくりの促進
を目指し、向台地域包括センターと連携、地域市民へ研修や体操教室を実施。

③ について・地域のみなさまが在宅生活を継続できる包括的なシステムづくり

在宅におけるその人らしい生活の再現、ICFの理念に基づいたケアを行い、ハートフル田無が中心となり、訪問リハビリ、訪問看護が包括的な支援を進め、在宅による最期の看取りを行う(10名)、老健施設入所者の看取りも含め、個人の尊厳を尊重した在宅ケアを進めました。

(成果)

- 1) ハートフル訪問リハビリの訪問件数が増え、地域ニーズに応えている。
- 2) 訪問看護による在宅での「看取り」を地域医療と連携し、実践。在宅による看取りは増加。

④ について…サービスの向上、さらなる個別ケアの充実

その人らしい生活の再現、ICFの理念に基づいたケアを行い、社会参加を促します。パーソンセンタード・ケアの実践を行うために、各組織の活性化を狙うため、委員会等の改善、研修内容の再検討を行いました。

(成果)

- 1) 東京聖新会全体として、各委員会活動の連携を図り、不要な委員会を集約、特化し機能性を高めた。
- 2) 研修計画に則り、各研修を行いスタッフの組織性や専門性を向上させています。(法人全体で各種研修を実施)
- 3) 顧客満足度と職員満足度の向上を図る各種アンケートを継続実施し、環境改善が進んだ。
- 4) 東京都の補助金によって「見守り IT」「眠りスキャン」を10台導入し、稼働。夜間のトイレ誘導等に効果を表し、個別ケアが促進された。
- 5) 個別ケアの充実をすすめるために ICF の理念の普及を進め、職員個別の研修計画を作成し各種の研修を実施。東京都社会福祉協議会のキャリアパス研修講師過程終了者が2名他、外部研修を有効活用し、施設内研修の質の向上に努めた。

⑤ について…地域ニーズ反映した適切な入退所支援

市内各施設と連絡会を活性化し、的確な入退所相談の実施。緊急時に連絡を取ることのできるシステムの見直し、緊急入所なども含め、緊急受け入れ時の情報不足に対する対応策として、情報連絡会にて、市内施設統一書式を提案しています。

(成果)

- 1) 地域ニーズに応えるために、アンケートなどを実施。
- 2) 向台町地域包括支援センター、フローラ居宅支援事業所、ハートフル訪問看護ステーション、訪問リハビリと綿密な連携を図り、フローラ、ハートフルの入退所を促進し、迅速な入所、退所した後のフォローを行う等地域のニーズに即応した。
- 3) 目指せ!待機者ゼロをスローガンとした。
- 4) 合同主任室の適切な設置により、多様な地域に即応できる体制とした。

⑥ について…地域社会に向けての貢献と法人運営の透明化

地域市民の皆さまと地域包括センターと協働による、災害時に強く、社会情勢に対応できる施設運営を進めます。また、介護保険制度改定に従った適正な施設運営等、誰にでもわかる透明性の高い法人、利用しやすいサービスの提供を図っています。より地域に密着できるシステムを検討するために法人内各委員会等の組織の再編を行いました。スタッフへの定期的な面接を行い適正な人事考課を実施しています。

3S（スマイル・セーフティー・スリム）と3K（綺麗 快感 心地良い）をスローガンとして各委員会で検討し、コストダウンを進めた結果、経費の削減が進みました。

（成果）

- 6) 地域包括ケアの在り方の検討、災害時に頼りになる地域包括支援センターの活性化
「地域連携室」による地域各種のシンポジウムを開催。認知症カフェの隔月開催。
地域のFM ラジオ局にて法人の番組を制作し、また、JCOM テレビへの出演等行い、情報発信を実施。
- 7) キャリアパスによる適切な人員配置と人材の定着、確保と育成を図るため、職員報酬のアップを実施。技能実習生制度についてベトナム人3名採用が内定する。
- 8) 地域自治体等との防災協定による環境整備、大規模災害時の避難所訓練(向台小学校にて実施、参加者1300人)に法人として参画し、非常時への備えの再確認とした。
- 9) 補助金等の申請とコストダウンの励行により、経費の削減の励行
- 10) 消耗品仕入れ等の一括購入の検討について、今後は紙おむつの仕入れを進める予定となっていたが、次年度の実施に努める
- 11) 法人HPを定期更新、随時更新し、また会計報告を始めとする、あらゆる情報をHPを活用し発信している。次年度は定款の掲載を予定し法人運営の透明化を進めている。

⑦ について…設備の新規購入、保守点検

デイケア部分の有効活用と各補助金制度を活用し、車両購入や、施設内各所の改善修理等を行いました。

（成果）

- 1) フローラに「見守りカメラつきロボット」20台を導入し、利用者の安心安全を図った。
- 2) ハートフルにコミュニケーションロボット16台購入、16台を6ヶ月間のレンタルとし、利用者の活動を高め、社会参加を促進した。
- 3) ロボット作動についての情報共有促進のために記録ソフトを法人に導入
- 4) その他、浴槽、ベッド等備品の点検、施設設備点検を実施。

⑧ 社会福祉法人として地域、社会貢献に繋がる新たな可能性を検討し、チャレンジしています。介護コミュニケーションロボットの実証実験を日本医療福祉介護機器開発研究機構(AMED)一般社団法人ユニバーサルアクセシビリティ評価機構とコラボレーションし、研究開発に努め、提言を行います。

社会福祉法人本来の在り方、基本理念を再確認し、法人理念の実現に向けて的確なサービス提供を行います。理念実現のために足りないものはなにか、必要なのかを検討し、そのために新しい分野での可能性を探り、様々な挑戦を行ってまいります。

(成果)

- ・ 社会福祉法人法改正に伴う、法人役員会等の在り方を役員会にて検討。
- ・ FM西東京ラジオ放送 50 回記念番組を企画し放送する。日本福祉大学田島教授をはじめとする学識者、専門家、地域の施設職員、その他地域を活性化している地域市民、現場職員等、様々なゲストに出演いただき、各種の情報発信を行った。
- ・ 地域青少年育成けやき会、地域ふれあい会共催、向台小学校、田無第 4 中学校、各 PTA、オヤジの会、少年野球ホワイトライオンズ、銀寿会、むつみ会、向ヶ丘幼稚園、新町児童館、東京聖新会後援 「地域餅つき会」 700 名
地域ガーディアン、自治会、向台小学校、西東京市南部圏域連絡会、西東京市社会福祉協議会、西東京市消防署、FM 西東京、赤十字飛行隊群馬支部、西東京市等による 「大規模災害避難所訓練」 600 名

東京聖新会は、人的、資金的、企画、運搬支援行う

「地域餅つき会」と「大規模災害避難所訓練」のコラボ開催 延べ参加者 1300 名



- ・ 地域音楽会 東京聖新会 地域青少年育成けやき会、地域ふれあい会、向台小学校、田無第 4 中学校、各 PTA、聖新会ショイント地域の子どもたちよさこい 250 名



- ・ 第 18 回市民介護研修開催

- ・駅前ハンドベル
- ・法人施設と施設機器を毎朝 50 分地域市民に向けて無料開放。理学療法士常駐。
- ・認知症カフェ月一回開催。
- ・市民卓球倶楽部に施設機器(卓球台無料開放)

<今年度の調査研究>

2017.11 月日本テクノエイド協会 トレンドマスター赤ちゃんロボット 20 台

2017.12.月東京都医療福祉開発機器モデル事業 パラマウントベッド「眠りスキャン」10 台

2018.1 月 JARI.Amed 医療福祉開発機器開発実証実験 NTT データ経営研究所、NTT データ関西 Sota10 台

<学会発表講演採択論文等>

- ・第 18 回日本認知症ケア学会学術集会 2017. 5. 26
- ・第 59 回日本老年医学会学術集会 2017. 6. 16
- ・第 35 回日本ロボット学会学術集会 2017/09/11-14
- ・第 65 回アイルランド老年医学会、2017. 09. 28-30 Irish Gerontological Society 65th Annual & Scientific Meeting, Wexford, 28-30 September 2017
- ・第 21 回日本遠隔医療学会学術大会 2017. 10. 01
- ・インターライ研究会講演 2017. 10. 26
- ・第 16 回インターライケア学会東洋大学シンポジスト 2017. 10. 28
- ・第 13 回東京都福祉保険医療学会 2017. 12. 13
- ・全国社会福祉協議会講演 2018. 1. 22
- ・千葉大学看護学部講演 2018. 1. 23
- ・認知症指導者関東ブロック東京大会講演 2018. 02. 24
- ・西東京市認知症講演
- ・群馬県みまも講演
- ・西東京市社会福祉法人連絡協議会シンポジスト

- 1) NTT データ News release コミュニケーションロボットを活用した「高齢者支援サービス」の実証実験を東京聖新会・社団法人 UA 評価機構とともに開始しました
<http://www.nttdata.com/jp/ja/news/release/2015/032400.html> 2015.03
- 2) 尾林和子、増山茂、小島康平、高橋椋一 介護施設における見守りシステム付きコミュニケーションロボット導入に向けての環境整備と調査 日本遠隔医療学会雑誌 Vol.14(1), 2018 (in press)
- 3) Obayashi K., Kodate N. and Masuyama S. Socially assistive robots and their potential in enhancing older people's activity and social participation JAMDA May 2018 Volume 19, Issue 5, Pages 462-463 DOI: <https://doi.org/10.1016/j.jamda.2018.02.015>
- 4) 尾林和子ら 認知症高齢者でも有効に働き超高齢者にも効果があるコミュニケーションロボットの介護施設導入効果 第 60 回日本老年医学会学術総会 2018.6.16
- 5) Kazuko Obayashi et.al. Measuring impacts of introducing communicative robots with infra-red radiation monitoring system on workload of night shifts in nursing care facilities Irish Gerontological Society 65th Annual & Scientific Meeting, Wexford, 28-30 September 2017

- 6) 尾林和子、増山茂 見守りシステムを伴うコミュニケーションロボットの導入が施設介護労働者の深夜間勤務負担に及ぼす効果 日本ロボット学会誌 2018 Vol.36 (accepted)
- 7) 尾林和子、増山茂ら 「眠リスキャン」導入は介護施設勤務介護者の深夜から明け方の勤務負担を軽減する 第36回日本ロボット学会学術集会 2018.9.5-8

＜新聞テレビなどのメディア＞

- ・ 公明新聞 2017. 04. 29
 - ・ 日刊工業新聞 2017. 09. 01
 - ・ スイス国営テレビ 2017. 9. 28
 - ・ 京都新聞・中国新聞など共同通信配信記事 2018. 01. 12
 - ・ 高齢者住宅新聞
 - ・ STATNEWS(アメリカボストン)2018. 2. 5 : Japan faces its old age with robots and virtual reality Part Two: A Bot to Watch Over Me (私を見守るロボット)
- (<https://www.statnews.com/2018/02/05/aging-japan-robots-virtual-reality/>)

今年度の各種研修講師

- ・ 西東京市高齢者支援課各種研修講師
- ・ 東京都認知症介護実践リーダー研修カリキュラム委員
- ・ 東京都認知症介護実践リーダー研修講師
- ・ 東京都社会福祉協議会キャリアパス人材育成研修講師
- ・ 東京都社会福祉協議会人材育成講師派遣事業講師
- ・ 川崎市社会福祉協議会認知症研修
- ・ 全国コロニー協会研修講師 他



赤十字飛行隊群馬支部ヘリコプター飛来

「地域餅つき会」と「大規模災害避難所訓練」のコラボ開催



＜適正な運営を進める＞

社会福祉法人の使命のひとつとされる「地域社会貢献」については、より高い「公共性」を求めつつ、「社会ニーズに応えられる先見性」をもった取り組みを進め、管理運営の透明化を進めます。 また、事業継続計画(BCP)の整理等、危機管理の充実、身体高速ゼロの実践、苦情対応の充実、高齢者虐待防止への取り組み、防災ネットワーク、防災協定締結、介護保険改定に向けての対応など継続し、適正なる運営を進めてまいります。

